

「今一度、政治家として問われる資質とは」

氏名 浅野 健

政治家の条件として、渡辺先生は「志」、「演説力」、「人間性」とあげられ、この次に来るものは何かと問われ、私は「普段からの知り合い」とあげた。もちろんこの答え方は三者三様であるが、次の衆議員選挙では、大きな旋風を起こすであろうと言われてい、大阪市の橋本市長の政策に、衆議員の定数半減、衆議員の廃止を掲げている。これを市長が推す理由には、財政支出の削減や、審議の効率化などであるが、参議院を廃止しては審議の公平性を保てない。他にも「候補者を政策中心で選んで欲しい」と訴えている。確かに、政策を情報配信すれば、葬式にも、結婚式にも出ず、国会議員は資金や時間の問題で楽になるかもしれない。

このように、配信するのは容易いが、誰にでも扱いやすい情報端末を開発する技術、資金、どれほどの扱いやすさを目標にしているのか、何時までに開発できるのか全く見えない中で、議員を削減しては結局最後に取り残されるのは、情報に疎い高齢者や、次世代を担う子どもたちで、情報を配信できる一部の人間の意見で決めたことに、国民がトップダウンで従う恐ろしい世の中である。

例え、優れた情報機器が開発されたとしても、人と繋がる時間はますます減少していき、これで人間の持つ正常な感情など保てるのか、政治家はロボット化してしまわないか。

先に戻り、例えば葬式、結婚式、地域のお祭りなどは、地元から意見を吸い上げるチャンスであり、政治家が一人の人間として地域の人々と一喜一憂して、お互いを思い遣る。このプロセスを省いてしまい、地域の思いは国全体へ通じるのか。私なら顔の見えない、どこの馬の骨かも分からない相手には、国政を任せる気にはなれない。やはり顔の見える、「普段からの知り合い」として、地域にどれだけ多く入り、実情を知っているか、自分達の名前や住む場所は知っているか」このような候補者へ票を投じたい。

加え、「候補者を有権者が政策で判断する」とあるが、地域の政策を判断するのは、高齢者や入院患者、主婦などの情報弱者ではどれだけ可能なのか。現実的には「候補者の顔」に頼らざるを得ず、情報弱者には「候補者の顔は見えない、政策も理解しにくい」このようなジレンマに陥らないのであろうか。

候補者と出会う機会は、単純に三分の一となり、有権者が政治に参加している意識や感

覚は、ますます遠のく気がするのである。

ゆえに、国会議員を削減する議論意外にも、現状維持で、やる気に満ちあふれた、資質のある議員を国会へ当選させて、地域の活性化も、国全体の活性化もバランスよく議論でき、世界へもアピールできる議員を、多数登場させるにはどうすべきであるか」も議論したい。